

2025年度 成人科テキスト

ぶどうの木

第5号



神は言われた。「生き物が水の中に群がれ。鳥は地の上、天の大空の面を飛べ。」神はこれを見て、良しとされた。神はそれらのものを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、海の水に満ちよ。鳥は地の上に増えよ。」夕べがあり、朝があった。第五の日である。

創世記 1章 20-23節

名前 _____

常盤台バプテスト教会 「教会の約束」

私たちは、神のめぐみによってイエス・キリストを主と信じ、バプテスマをうけて、主の教会に加わったので、聖霊の助けにより喜んで互いにこの約束をいたします。

私たちは、聖書が信仰の規範であることを信じ、その教えに従います。

私たちは、この教会が人によって成ったものでなく、神によって成ったものと信じます。

私たちは、主の日の礼拝を守り主をたたえ、教会の集まりにつとめて出席し、バプテスマと主の晩餐の二つの礼典を守ります。

私たちは、教会のきよくなること栄えることを祈り、主にある兄弟姉妹の愛をもって愛しあい、互いの喜びと悲しみを共に分けあいます。

私たちは、この教会をささえ、全世界に主の福音をのべ伝え、神のみむねの行われるために、喜んで奉仕し、献金をいたします。

私たちは、日々の祈りと家庭の礼拝につとめ、神よりあずかった子どもたちをみむねにそうように教え育てます。

私たちは、きよい心と正しい行いとをもって、まことの道をあらわし、隣り人を愛し人々を救い主に導きます。

私たちは、主と会う日まで、この約束を守ります。



12/14 第27課「日々の祈りと家庭の礼拝につとめ」

12/21 第28課「神より預かった子どもたち」

12/28 第29課「みむねにそうように教え育てます」

1/11 第30課「きよい心」

1/18 第31課「正しい行い」

1/25 第32課「まことの道をあらわし」

執筆担当：【第27～29課】友納 靖史 牧師 【第30～32課】田中 由記子 姉

表紙イラスト：友納 聖子 姉

参考図書

- 「バプテストの教会契約」 1993年 村椿真理 ヨルダン社
- 「教える喜びと学ぶ喜び」 2009年 朴永基 いのちのことば社
- 「バプテストの信仰」 2015年 日本バプテスト連盟宣教研究所
- 「人生を導く5つの目的」 2015年 リック・ウォレン PDJ
- 「聖書教理がわかる94章」 2016年 J・I・パッカー いのちのことば社
- 「バプテスト教理問答書」 2004年 鈴木昌 訳編 東京聖書教会
- 「10代から始めるキリスト教教理」 2022年 大嶋重徳 いのちのことば社

こどもをまねく

1. こどもをまねくともはどんなた
 2. こどもをまねくともはどんなた
 3. こどもをまねくかみはどんなた

こどものすきなるイエスさまよ
 こどもをますもなるイエスさまよ
 こどもをますくうイエスさまよ
 (くりかえし)

ホサナとうたえホサナとうたえ

こどものすきなイエスさまを

1 こどもをまねく 友はどなた

子どものすきな イエスさまよ

(くりかえし)

うた うた
ホサナと歌え ホサナと歌え

子どものすきな イエスさまを

2 こどもをまねく 王はどなた

こどもをまもる イエスさまよ

(くりかえし)

3 こどもをまねく 神はどなた

こどもをすくう イエスさまよ

(くりかえし)

* 「ホサナ」は、「主よ、おすぐいください」という意味。

主をまちのぞむものは

C F G Em
主をまちのぞむものはあらた

A Dm G7 C
にちからをうけてのぼる一

C7 F G Em
一はしりつかれずあゆみてうま

Am F Dm7 G7 C
ずわしのようになのぼる一

主を待ち望む者は
新たに力を受けて上る
走り疲れず 歩みて倦まず
鷺のように上る

(イザヤ書40:31より)

12/14

第27課 「日々の祈りと家庭の礼拝につとめ」

～12月の約束文～

私たちは、日々の祈りと家庭の礼拝につとめ、神よりあずかった子どもたちをみむねにそういうに教え育てます。

テサロニケの信徒への手紙 5章16-18節

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。

ヨハネによる福音書 4章23節

しかし、まことの礼拝をする者たちが、靈と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。

皆さんは、日に何回、祈りの時を持っておられますか。朝起きて祈り、夜寝る前に祈り、食事の度ごとに祈る。多くの方はきっとこのサイクルが身についておられることでしょう。旧約聖書でダニエルが日に三度祈ったとあるように(ダニエル書6章11節)、ユダヤ教徒は今も一日3回(朝9時・正午・午後3時)、神の前にひざまずいて祈る習慣を持っているようです。

『教会の約束』に、「日々の祈りと家庭の礼拝につとめ」とある英語原文を読むと、「家族を守り支え、密やかなディボーション(聖書を読み祈る静思の時)にもつとめます：We also engage to maintain family and secret devotions」となっています。また、バプテスト同盟発行『教会の約束』では「ひとりで祈ることや家族と共に祈る生活を大切にし…」と訳出されていることを念頭に入れて、今日の箇所を共に分かち合いましょう。

「日々の祈りにつとめる」とは、現代に生きる私たちへ神は、どのように祈ることを願っておられるのでしょうか。

主イエスが教えられた最も有名な「主の祈り」。これは当時、神殿で祈る姿を人に見せることを目的として祈る人々への訓戒として、人前ではなく奥まった部屋で隠れて祈ること、言葉数が多いだけ神に聞かれるのではないと語られた直後に教えられたものです

(マタイ福音書6章5-15節)。

教会に来て間もない方は、まず「主の祈り」を読み祈ることだけで十分です。そして何よりもこの「主の祈り」は身体が弱り病床の床において、魂に刻まれた祈りとして、最後まで共に祈れる恵みと不思議な力を秘めたものであることをこれから的人生で体験なさることでしょう。

祈りの次なるステップとしては、主イエスが語られた「わたしの名によって願うことは、何でもかなえてあげよう(ヨハネ福音書14章13節)」とあるように、自分自身の言葉で願い祈ることに、慣れ親しむことがあります。この祈りは、立派な言葉で祈ること以上に、個々人の抱える心と魂の叫びや課題を率直に祈りの言葉に表現することを主は何よりも喜んでくださると知ることも大切です。何より忘れてはならないことは、私たちが人生の苦しみの中に置かれ、たとえ口から祈りの言葉が出ない時でさえ、主イエスと共に聖霊なる神が私たちのために祈っておられることです。

(これは「執り成しの祈り」と言われ、人に代わって別の人人が祈る「祈り」のことです：ヘブライ7章25節・ローマ8章26節参照)。

祈りは主なる神さまとの交わりの時です。ですから、私たちが主なる神に愛されていることを知る時、息をするようにいつでも自然に祈る恵みに与り、平安と希望の中で日々を過ごすことができます。

使徒パウロがテサロニケの教会へ勧めた今日の御言葉（テサロニケ一5章17節）は有名です。ここで語られた「絶えず祈る」とは、修道院で祈りに専念する修道士のように四六時中祈れと言われたのではありません。日々何をするにしても、神を見上げ常に祈り心を持って神と共に歩むことが奨められています。

ある方からお聞きして感銘を受け、私も実践していることがあります。それは、その方がノンクリスチャンの友人から、「手紙やメールの最初や最後に、『お祈りしています』と書く時、あなたは本当にその人の為に祈っていますか?」と問われ、ハッとさせられました。ですからそれ以来、『祈っています・・・』と記す時、必ず筆を止め、短くても目を閉じ祈るようになりました」と。

「家庭の礼拝につとめる」とは、何をさしているのでしょうか。

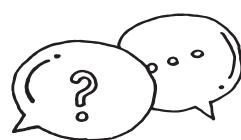
初代教会から長い間、今日のような教会堂ではなく、家々に集まり礼拝をする時代がありました。この約束文で言われる「家庭の礼拝」には、二つの意味があります。一つは文字通り、それぞれの家庭で、夫婦や子どもたちと共に家庭でも「礼拝」を行い、個々の祈りだけでなく、賛美や証しとメッセージを分かち合う時を持つ大切さも含まれます。家族親族、地域や友人を家庭に招き、信仰の継承を願う家庭礼拝です。

もう一つの意味は、「サンデー・クリスチャン」と呼ばれる、「日曜礼拝にだけ行くクリスチャン」生活をすることなく、他の6日も日々、神さまを崇め賛美する生き方を勧める信仰の言葉であります。

主イエスがサマリアの女性との対話で、「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る」と語されました。当時、ユダヤ人だけが礼拝を赦されたエルサレム神殿でも、サマリア人が別の礼拝所としたゲルジム山でもなく、世界中どこでも差別されずに神を礼拝できる新しい信仰の始まりを宣言されました主イエス。主は場所も時も限定することなく、いかなる時にも神を崇める生活こそが「まことの礼拝」だと教えておられます(ヨハネ福音書4章21-24節)。

バプテスト教会は幼児洗礼を行いません。親であっても子どもたち自身が神を信じてバプテストを受ける決断をするまで、家庭においてその子どもたちを「求道者」の一人として大切に関わる愛と知恵が必要とされます。そのため正に「家庭の礼拝につとめる」、つまり家庭でもどこでもキリストの証し人として生きる大切さを互いに覚える約束としてここに記されているのです。子どもたちとの具体的な関わりは、次週の学びへと続きます。

今回の学びを準備するなかで、「家庭の礼拝につとめ」との約束文がその原文の意味から少し異なっていることを知りました。今後、この日本の地で聖書の教えに基づいて、バプテストの信仰に立つキリスト者としての新たな『教会の約束』を改訂する時も来ているのかもしれません。皆さんはどう思われますか。



話してみましょう

- 皆さんは、一日に何度祈っておられますか。またどのようにしてその時間を作り出しておられますか。
- 日曜だけでなく、日々の生活の中で、神を礼拝する時のように、神さまの臨在(神さまが生きて働かれ、共におられる)を感じ、家族や友人に、その証しを分かち合う時がありますか。

12/21

第28課 「神より預かった子どもたち」

～12月の約束文～

私たちは、日々の祈りと家庭の礼拝につとめ、神よりあずかった子どもたちをみむねにそういうに教え育てます。

詩編 127篇3節

見よ、子らは主からいただく嗣業。胎の実りは報い

今日の御言葉を深く理解するため、次の聖書箇所を思い起ししましょう。

第一に、創世記1章28節、「神は彼らを祝福して言られた。産めよ、増えよ、地に満ちて、従わせよ。」

第二に、コリントの信徒への手紙一7章7節、「わたしとしては、皆がわたしのように独りでいてほしい。しかし、人はそれぞれ神からの賜物をいただいているのですから、人によって生き方が違います。」

創世記には詩編127篇3節と共に、人は一人ではなく夫婦となって子が与えられることを神からの祝福とします。しかし一方で、使徒パウロの言葉のように、独身でいること、結婚すること、子どもが与えられること等、それも神から異なった賜物や人生が与えられていることを喜び合う大切さを語ります。どちらか一方を強調する事がないように、キリストの愛に基づく教会共同体は心に刻んで参りましょう。

今日の約束文、「神より預かった子ども(※)たち」は二つの意味があります。第一に、その方が肉親の父母を通し、与えられた血のつながった子どもや養子縁組などを通して養育している子どもたちのことです。

第二に、キリストの教会は「神の家族」であり、教会の中で共に歩む方々の子どもたちを指す言葉です。双方共に重要なことは、肉親の子どもも、そうでない子どもも、親や大人の所有物や支配下にあるのではなく、神がその人に託した、一時的に預けた大切な存在として共に見守り、それぞれの子どもの特性や人格を認め、かつ配慮をもって叱咤激励を含め育む大切さです。

特にバプテスト教会が大切にしている信条の一つ、「幼児洗礼の否定」があります。これは聖書のどこにも親が子どもにバプテスマを施す箇所がないこともですが、何よりも、救いに与るとは、大人や子どもも自らの決断と告白によってイエスを主と信じ、バプテスマを受ける大切さを信じる群れだからです。

聖書の中のモデルとして、旧約から預言者サムエルの母ハンナの歩みに目をとめましょう。イスラエルに王がまだ誰も擁立されていない時代、ハンナは夫エルカナとの間に願うように子どもが与えられず悩み苦しみました。そしてハンナは神殿に何度も訪ね、神の前に請願を立てて祈る中、遂に男の子が与えられたのです。この時、ハンナは授かったこの誕生の意味を神より示され、再び神殿を訪ねて祭司エリにこう申し出ました。「わたしはこの子を授かるようにと祈り、主はわたしが願ったことをかなえてくださいました。わたしは、この子を主にゆだねます。この子は生涯、主にゆだねられた者です(サムエル上1章27-28節)」。

また、新約聖書では、イエスの母マリアの信仰から多くを学べます。その一つ、イエスが12歳の時、エルサレム神殿へナザレ村の人々と一緒に旅をした際、帰りの道でイエスがその一行の

中に居ないことに気づいたヨセフと母マリア。3日間、行方知れずで、遂にイエスが神殿の境内で学者たちの真ん中に座って問答している姿を発見し、驚きつつマリアは言いました。「なぜこんなことをしてくれたのですか。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのですよ！(ルカ福音書2章48節)」。するとイエスは答えられました。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかつたのですか」。この状況をルカは「両親にはイエスの言葉の意味が分からなかつた(2:50)」と説明しました。今、私たちは、神の子であるイエスが天におられ、神殿で神としてあがめられているヤハウエ(主)なる神のことを「父」と呼ばれたことは不思議とは感じません。しかし、母マリアにとっては、父なる神の働きを担う前の少年イエスが将来担う使命を完全に理解していました。にもかかわらず、息子イエスの言葉を聞いた母マリアが、対応した姿をルカはこう証します。「母はこれらのことすべて心に納めていた(2:51)」と。ここには母マリアがイエスを神から預かった神の子として、丁寧に関わり育てる姿は注目に値します。

「神より預かった子どもたち」という感覚を呼び覚ます大切な学びの一つに、近年使われる「バウンダリーズ(境界線)」という言葉があります。これは、アダムとエバが蛇(サタン)からの囁きに誘惑され、神と交わした約束を忘れて、誘惑に負け神に喜ばれない一線を人間が越えた出来事にも関わります。サタンは「決して死ぬことはない。それを食べると目が開け、神のように善悪を知る者となる(創世記3章)」と、人間が自らの領分を越え、神のようになる誘惑を今も仕掛けてきます。

歴史上、人間は繰り返し、神に創られた被造物であること、真の神を崇め従うことを忘れ、境界線を越えて、神ならぬ者(自らや権力者)を神とする過ちを犯し続けています。またダビデがバトシェバを得るために彼女の夫を殺めた出来事のように、隣人に対しても超えてはならない、身体的、精神的、感情的、靈的な境界線の重要性を学ぶ大切さが求められています。

「親替え」という言葉があります。たとえ肉親の父親(母親)から愛される経験のなかつた大人であっても、教会の神の家族との関わりと共に、何よりも父なる神の愛をイエス・キリストを通して注がれる時、その人は父なる神を、真の親として、多くの愛に触れ、人生の痛みが癒され、救われる機会とされるからです。

エフェソ5章1-2節に約束されている神の恵みを共に体験する教会、神の家族とされて参りましょう。

「あなたがたは神に愛されている子どもですから、神に倣う者となりなさい。

キリストがわたしたちを愛して、御自分を香りのよい供え物、つまり、いけにえとしてわたしたちのために神に獻げてくださったように、あなたがたも愛によって歩みなさい」

※ 古く幼子を供え物(生贊)とした歴史を踏まえ、現在は「子ども」と表記



- 皆さんは、どのような時、ご自分のお子さんや、教会の子どもたちとの出会いを通して、「この子は自分の子ではなく、神によって預かっている子どもである」と感じられますか？
- ご自身の親から愛された感じが出来なかった方も、「わたしは神の子として愛されている」と、聖書の言葉や教会生活を通して、励まされた聖書の言葉や経験がありますか。

12/28

第29課「みむねにそうように教育てます」

～12月の約束文～

私たちは、日々の祈りと家庭の礼拝につとめ、神よりあずかった子どもたちをみむねにそうように教育てます。

詩編143篇10節

御旨を行うすべを教えてください。あなたはわたしの神。

恵み深いあなたの靈によって、安らかな地に導いてください。

ユダヤ教の教育で子どもたちが最初に覚える聖書箇所は、申命記6章4節以下の言葉です。

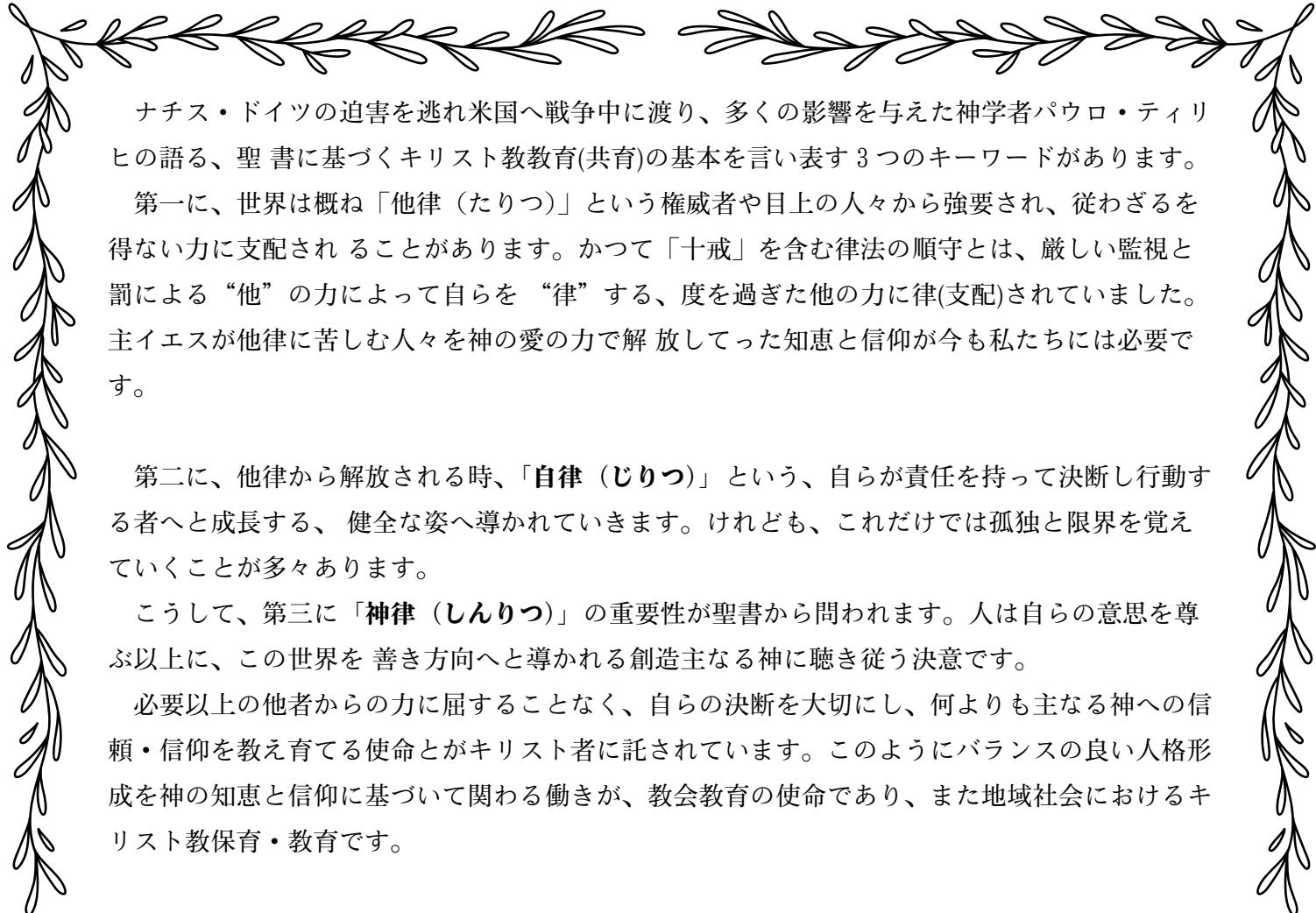
「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。今日わたしが命じるこれらの言葉を心に留め、子供たちに繰り返し教え、家に座っているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい・・・。」

この箇所について、主イエスも「これは最も重要な第一の掟である」と教えられました（マタイ福音書22章37-39節、他：マルコ12:28-34、ルカ10:25-28）。しかし主は申命記の言葉に加え更に、「第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい』（マタイ22:39）」と語られたのです。

これらの教えを知って実践する上で大切なことは、私たちがまず神の愛に出会って、愛に基づく共同体の中で、子どもも大人も育まれることです。ヨハネの手紙でこう語ります。

「神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。（ヨハネ一4章9-11節）」

教会における教育は本来、共育(共に育つ)です。これまで教師や牧師が教え導くという上下関係が教会の中にも形作られていました。もちろんそれも大事ですが、それ以上にバプテスト教会は成立当初から、教員同士が、聖書を聖靈の導きによって示され、正しい教理に基づいて互いに分かち合う自由が貴ばれました。これは今日、日本の学校教育で実践されている、「アクティブラーニング」の先駆けでもあります。これまで教師が答えを生徒に教え、丸暗記する教育形態でしたが、生徒同士が答えを共に導き出すことを教師が背後で支えるという学び方に変わってきました。100年以上前から既にバプテスト教会が行っていた教会教育方針が今注目されている姿には驚かされます。



ナチス・ドイツの迫害を逃れ米国へ戦争中に渡り、多くの影響を与えた神学者パウロ・ティリヒの語る、聖書に基づくキリスト教教育(共育)の基本を言い表す3つのキーワードがあります。

第一に、世界は概ね「他律(たりつ)」という権威者や目上の人々から強要され、従わざるを得ない力に支配されることがあります。かつて「十戒」を含む律法の順守とは、厳しい監視と罰による“他”的力によって自らを“律”する、度を過ぎた他の力に律(支配)されていました。主イエスが他律に苦しむ人々を神の愛の力で解放していった知恵と信仰が今も私たちには必要です。

第二に、他律から解放される時、「自律(じりつ)」という、自らが責任を持って決断し行動する者へと成長する、健全な姿へ導かれていきます。けれども、これだけでは孤独と限界を覚えていくことがあります。

こうして、第三に「神律(しんりつ)」の重要性が聖書から問われます。人は自らの意思を尊ぶ以上に、この世界を善き方向へと導かれる創造主なる神に聴き従う決意です。

必要以上の他者からの力に屈することなく、自らの決断を大切にし、何よりも主なる神への信頼・信仰を教育てる使命とがキリスト者に託されています。このようにバランスの良い人格形成を神の知恵と信仰に基づいて関わる働きが、教会教育の使命であり、また地域社会におけるキリスト教保育・教育です。

私たち人間の知識や知恵を超えて導かれる神の御旨を知る力、従う力を培ってくださる力の源は、「聖霊」なる神です。詩編143篇10節には、主イエスがペンテコステの日に弟子たちに父なる神より送られた出来事を先取りし、神の靈に導かれる大切さが語られます。使徒パウロがガラテヤの教会に送ったこの信仰の勧めも、私たちの人生で結ぶべき信仰の実を明確に告げています。

「…靈の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔軟、節制です。これらを禁じる捷はありません。キリスト・イエスのものとなった人たちは、肉を欲情や欲望もろとも十字架につけてしまったのです。わたしたちは、靈の導きに従って生きているなら、靈の導きに従ってまた前進しましょう。うぬぼれて、互いに挑み合ったり、ねたみ合ったりするのやめましょう」。（ガラテヤの信徒への手紙5章22-25節）



- 子どもたちや次世代に、ぜひこれだけは覚えて欲しいと願っている、聖書の御言葉や教えとは何だと、あなたは思われますか。
- 主イエスがゲッセマネの園で祈られた、「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください(ルカ22章24節)」との祈り。この祈りのように、あなたも自分の思いを超えた御旨に従うため苦闘された経験がありますか。

～1月の約束文～

私たちは、きよい心と正しい行いとをもって、まことの道をあらわし、隣り人を愛し人々を救い主に導きます。

「きよい心」とは罪の汚れのない心を指します。私たちは、皆、罪を持っています。自覚している罪もあれば、自分では気づいていない罪もあります。ですから、神さまの前で、「私はきよい心を持っています。」と断言できる人はいないでしょう。きよい心をもっておられるのは、イエス・キリストお一人です。私たちは、自分の力できよい心をもつことはできませんが、主により頼むことにより、聖霊に満たされて、きよい心をもって歩むことができるのです。

マタイによる福音書 5章8節

心の清い人々は、幸いである、
その人々は神を見る。

詩編 24篇3－5節

どのような人が、主の山に上り／聖所に立つことができるのか。
それは、潔白な手と清い心をもつ人。
むなしいものに魂を奪われることなく／欺くものによって誓うことをしない人。
主はそのような人を祝福し／救いの神は恵みをお与えになる。

マタイによる福音書 23章25－26節

律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。杯や皿の外側はきれいにするが、内側は強欲と放縱で満ちているからだ。ものの見えないファリサイ派の人々、まず、杯の内側をきれいにせよ。そうすれば、外側もきれいになる。

1. きよい心

今もそうですが、特に旧約聖書の時代は、きよいものと汚れたものを区別することがとても大切なことでした。汚れたものを徹底的に排除して、自分をきよく保つことによって、神のみ前に出ることのできる者になろうとしていました。

しかし、汚れた動物を口にしない、汚れた人々と交流しないなど、いくら気をつけても、心がきくなるわけではありません。

人にどう見られるかを重要視し、外見をきれいに見せることにばかり気を遣い、人のあらさがしをして、きよくない所を責め、自分さえきよくなれれば、それで良いと思っている人の心は、きよさとは対極にあります。

また、ルカによる福音書18章9節～14節の「ファリサイ派の人と徴税人」のたとえで、イエスさまは次のようにおっしゃっています。

あるファリサイ派の人が神殿で次のように祈りました。「神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。」と。ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら、「神様、罪人のわたしを憐れんでください。」言いました。イエスさまは、義とされて家に帰ったのは、ファリサイ派の人ではなく、徴税人の方だとおっしゃいました。

見た目がいくらかよくて、立派な人と思われていても、心の中が自分のことでいっぱい、欲や妬みであふれているなら、神さまとの関係性をきよく保つことはできないのです。

ローマの信徒への手紙 3章23-24節

人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。

2. 悔い改める

それでは、どうすれば、きよい心を持つことができるのでしょうか？

罪の中にいた私たちは、神さまから離れ、自分中心の生き方をしていましたから、自分など神さまの恵みを受けるに値しないと思っていました。しかし、神さまはそんな私たちを一方的に愛してくださいました。神さまが

用意してくださった様々な出会いを通してその愛に気づかされ、悔い改めるとき、つまり、方向転換をする時、それまで、自分の方にばかり向いていた私たちの心は、きよくされ、神さまの方に向くのです。

私たちが、「所詮、人間は罪深いものだから、仕方ない」と、自分に言い聞かせて、あきらめたりせずに、悔い改めることができるのは、キリストの十字架の恵みがあるからです。十字架の贖いがあるからこそ私たちは自分の罪に向き合うことが出来るのです。

また、パウロは、「悔い改めて神に立ち帰り、悔い改めにふさわしい行いをするように」(使徒26:20)と言っています。神さまの愛を受け入れて、心が神さまの方を向くだけでなく、行いも伴わなければならないというのです。「悔い改めます」と口で言ったり、心で思ったりするだけで、生活が何も変わらなければ、本当に悔い改めたとは言えません。

エフェソの信徒への手紙 5章1-2節

あなたがたは神に愛されている子供ですから、神に倣う者となりなさい。キリストがわたしたちを愛して、御自分を香りのよい供え物、つまり、いけにえとしてわたしたちのために神に獻げてくださったように、あなたがたも愛によって歩みなさい。

3. 神に倣う

心をきよくしていただき、悔い改めた私たちは、罪の中にいた頃の自分を脱ぎ捨て、心の底から新たにされて、神に倣う者となるのです。罪深く、弱い私たちが、神さまに倣う生き方をする…簡単なことではありません。不可能とさえ思えます。しかし、私たちは神さまに愛されています。私たちの罪を贖うために、ひとり子イエスをささげてくださるほどに、私たちを愛してくださっているのです。愛してくださっているだけでなく、神さまは私たちを「愛する子どもたち」と呼んでくださいます。神さまの愛を知って、その愛を受け入れるとき、私たちは神さまに倣う者として歩むだけでなく、私たちも、イエスさまがなさったように、助けを必要としている隣人を愛し、隣人の救いを祈り、神さまの愛を伝える者とならなければなりません。

聖霊に満たされ、助けられて、悔い改め、神さまに立ち帰り、神さまに倣う者として、きよい心をもって、神さまの愛を伝えるために歩んでまいりましょう。



話してみましょう

- ・自分の心を見つめて、その中にある清さ、汚れについて話してみましょう。
- ・神に倣う者として歩むために、心がけていることはありますか？
- ・悔い改める転機となった出来事を分かち合ってみましょう。

～1月の約束文～

私たちは、きよい心と正しい行いとをもって、まことの道をあらわし、隣り人を愛し人々を救い主に導きます。

「正しい行い」とは、神さまの目に悪い行いを避けることです。しかし、罪深い私たちは、何が神さまの前に正しいことがわからず、神さまのみ心ではないことをしてしまいます。また、正しくないとわかっているながら、やってしまうこともあります。この世の価値観にとらわれて生きている私たちが、イエスさまの十字架と復活を信じて、受け入れるとき、古い自分を捨て去り、新しくされて、正しい行いができる者とされるのです。

ローマの信徒への手紙 7章15節、17節

わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。

そして、そういうことを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。

1. 内在する罪

パウロは、初めはキリスト教徒を迫害していましたが、主によって変えられ、異邦人に主のみ言葉を伝える人となりました。自分のすべてを投げうって、伝道に身をささげるパウロが、「自分のしていることがわからない」「自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをする」(ローマ7:15)と言っています。そして、そういうことを行っているのは、自分ではなく、自分の中に住んでいる罪だと言っています。これは、決して、責任転嫁しているのではありません。自分の弱さを認め、告白する、謙虚な姿です。また、自分が傲慢にならないための神さまの恵みです。

こうするのが良いとわかっていてもできない、情けない自分、してはいけないとわかっていてもしてしまう、弱い自分…皆さんも経験があるのではないでしょうか？

では、このような罪深い私たちが、どうすれば、「正しい行い」ができるようになるのでしょうか。

コロサイの信徒への手紙 3章8－10節

今は、そのすべてを、すなわち、怒り、憤り、悪意、そしり、口から出る恥すべき言葉を捨てなさい。互いにうそをついてはなりません。古い人をその行いと共に脱ぎ捨て、造り主の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされて、真の知識に達するのです。

2. 新しい人

神さまを知らず、金銭や名誉、人からの評価などを一番大切にしていたとき、私たちの心には妬みや怒りなどの悪意がはびこっていました。しかし、そういう自分を捨て去り、主を受け入れ、主に従って生きることを決心した時、私たちは新しい人にならせていただいたのです。一度新しい人になれば、それで良しというわけではありません。罪深い私たちは、主に従って生きようと思っても、誘惑に負け、神さまではなく、自分中心の生き方に戻ってしまうことがあります。

ですから、神さまは、私たちを日々新たにしてくださるのです。この世のものに価値を見出し、神さまを見上げていなかった自分、暗闇を歩いていた自分を捨て去り、イエスさまの愛の衣を身に着けさせていただいたことに気づくとき、神さまの方を向くことの大切さ、主イエス・キリストを信じ、すべてを委ねて生きることの大切さに気づくのです。

ローマの信徒への手紙 12章2節

あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。

3. 新しい生活

罪を赦されて、新しくされた私たちですが、日曜日の教会では、クリスチャンらしく、神さま中心の生活をしているけれど、教会を出た途端、神さまを脇に置いて、金銭的豊かさや社会的地位に重点を置いて行動してしまうことが、少なからずあるのではないかでしょうか？

頭の片隅では違うとわかっていても、波風を立てずに暮らしていくため、クリスチャンである自分を封印してしまうことを、「日本はクリスチャンが少ないから仕方ないよね」と言い訳していないでしょうか？クリスチャンでない方と交流してはならないということではありません。何が良くて、何が悪いか分類して、守っていない人は裁かれるべきということでもありません。普段の生活ではクリスチャンの人に出会うことが珍しいのが私たちの社会ですが、それは出会いを通して神さまに変えていただいた体験を証しする機会でもあります。

様々な人が暮らすこの世の中で生きていく私たちが正しい行いをするためには、心を新たにしていただかなければなりません。「心を新たにする」とはどういうことでしょう。「心」と訳されている単語はギリシャ語の「ヌース」で、この単語は、単なる感情ではなく、「知性、理性、思考」を意味します。つまり、「心を新たにする」ということは、神さまのみ心が何であるかを知って、判断できるようになるということです。

私たちを新しくしてくださるのは神さまですが、何もしないでお任せするのではありません。主を求め、み言葉に耳を傾け、悔い改め、主に立ち帰ることが大切です。その上で、主によって変えていただくのです。そうすれば、この世にあって、神さまに喜ばれる正しい行いができるようになるのです。



話してみましょう

- あなたの正しい行いを妨げるものは何でしょうか。
- 新しくされたと自覚するときはどのような時ですか？
- 神さまはあなたにどのような行いを願っておられると思いますか？

1/25

第32課 「まことの道をあらわし」

～1月の約束文～

私たちは、きよい心と正しい行いとをもって、まことの道をあらわし、隣り人を愛し人々を救い主に導きます。

主イエス・キリストは、私たちの罪のために十字架にかかり、3日目に復活されました。そのことを通して、主は私たちに永遠の命へと至る救いの道を現してくださいました。主によって教会に呼び集められた私たちに託された働きは、主が再び地上に戻られるまで全世界にこのことを宣べ伝えることです。

ヨハネによる福音書 14章6節

イエスは言われた。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。」

1. 永遠への道

私たちの願いは、一人でも多くの方が父なる神につながることです。そこにたどり着くまでの歩みは人それぞれです。幼いころから教会に来ていた方、大人になってから神さまを知った方、一度神さまから離れて戻ってきた方、家族や友人に誘われてきた方、ミッション系の学校に通っていて、教会に来るようになった方、YouTubeでキリスト教に触れ、導かれた方…本当に様々です。しかし、どんな人であっても、主イエス・キリストと出会い、主イエス・キリストを通ることなしに、父なる神のみもとに行くことはできません。

主イエスとともに歩く、あるいは、主イエスに従って歩くのではなく、主イエス・キリストが道そのものなのです。つまり、「わたしの愛にとどまりなさい」(ヨハネ15:9)とおっしゃっているのです。そうすれば、主イエスの愛に包まれ、主イエスが真理のお方であることがわかり、生かされて、神さまに導かれるのです。

イエスさまを信じ、イエスさまの愛にとどまる生き方こそ「まことの道」であり、そのことを証ししながら、日々歩むことが「まことの道をあらわす」ことになるのです。

マタイによる福音書 23章37-39節

イエスは言われた。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』

2. 最も大切な戒め

神さまは私たちを愛してくださっています。どれほどの愛かというと、私たちを罪から救い出すために、そのひとり子をお与えくださったほどです。私たちが神さまを愛しても、愛さなくても、神さまは私たちを愛してくださいます。しかし、私たちが神さまの愛に応えて、神さまを愛するとき、神さまと私たちの間に人格的な交わりが生まれます。

イエスさまは、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして」（マタイ22:37、マルコ12:30、ルカ10:27）主を愛しなさいとおっしゃいます。自分のすべてをささげて主を愛するということです。「愛する」というと、相手を良く思う、大切にするという感情を表すと考えがちですが、神さまは私たちに、主を愛する者として行動することを願っておられます。「神さま、大好き！」と思っていても、行動がみ心にかなっていなければ、神さまはお喜びになりません。

また、隣人を自分のように愛することも、大切な戒めであると、聖書に書かれています。このみ言葉には、2つのポイントがあると思います。1つは、隣人を愛するためには、自分を愛さなければならないということです。自分が、自分が…と自分の思いばかり押し通すのではありません。神さまに創られ、神さまが「よくできた」と言ってくださり、神さまに愛されている自分を大切にすること。それができて初めて、神さまの愛する隣人をも愛することができるのです。

そして、2つ目のポイントは、「隣人」とは自分と仲の良い、近しい人のことだけではないということです。自分の苦手な人、できれば関わりあいたくない人、敵対する感情を持っている人のことも愛する、大切にすることです。それはとても難しいことですが、主を愛し、助けを必要としている隣人を愛し、互いに励まし、共につながり合う私たちの行動を通して、主の栄光、まことの道はあらわされていくのです。

ガラテヤの信徒への手紙 5章13節

兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせずに、愛によって互いに仕えなさい。律法全体は、「隣人を自分のように愛しなさい」という一句によって全うされるからです。

3. キリストにある自由

キリストにある自由は、自分勝手に好きなことをする自由ではありません。主を信じ、イエス・キリストに倣って生きることにより与えられる、罪や争い、恐れからの自由です。

この世の地位や経済力、人間関係によって得られる安心感は、永遠のものではなく、いつ失ってしまうかわからないものです。しかし、神さまは永遠に変わることなく、私たちを愛し、導いてくださるお方です。主と出会って、主に仕えて生きることを選ぶとき、キリストにある自由を与えられるのです。

神さまは、み心に従って歩むことを強制することはなさいません。主のみ心を求めて祈ることにより示されたことを選び取る自由が私たちにはあります。自分で判断して、選び取ることのできる自由を、他者への批判や攻撃に利用してはなりません。主イエスが示してくださったまことの道をあらわし、キリストを伝えることに用いてまいりましょう。



- 心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、主を愛していますか？
- 「自由」を間違って使わないために、気をつけていることはありますか？

話してみましょう • 主イエス・キリストを証しした体験を分かち合ってみましょう。

